OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国マンガにおける日本の位置付け ： 日本マンガの受容史
Author(s)	山中, 千恵
Citation	年報人間科学. 2001, 22, p. 125-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10578
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

韓国マンガにおける日本の位置付け

――日本マンガの受容史――

山中　千恵

〈要旨〉

本稿の目的は、日本マンガの流入によって、韓国のマンガに対する言説の中で「日本」がどのように位置付けられていったのかに注目しながら、韓国マンガの歴史の全体像を確認することにある。

韓国の近代マンガは、日本の植民地時代に持ち込まれたマンガが始まりだとされている。韓国では、五十年代頃に低俗な日本マンガが流入したため、マンガは低俗なものとみなされるようになったとする見方がある。こうした考え方には、日本文化を低俗なものととらえるような、韓国に置ける日本イメージが影響している。

しかし、日本マンガの受容史をたどると、マンガの低俗性と日本を結びつける思考方式は、八十七年の民主化以降に完成されたということがわかる。民主化以前は、海外渡航は自由化されておらず、マンガの読者が得られる日本の情報は、限られたものであった。また、公式的な日本マンガの輸入は禁止されていた。そのため、当時、日本マンガは、韓国人作家の作品として読まれた。マンガは、かならずしも「日本」という要素とダイレクトに結びついてはいなかったのである。むしろ「マンガ房」や貸本のイメージが大きな意味を持っていたと思われる。

韓国のマンガと、日本イメージが結びつく過程を確認しようとする、本稿の試みは、韓国の大衆文化観と、日本イメージの関係を知る上での手掛かりとなるだろう。

はじめに

今年の夏、離散家族の面会が、ソウルにある韓国総合展示場COEX（コエックス）で行われた。その様子は各国に放送され、人々は歴史の変化を実感した。

これほど劇的ではないが、COEXでは、韓国で起こっているもう一つの変化を実感することができる。会場には、今年の夏にオープンした巨大なショッピングモールが併設されている。その中で若者たちに特に人気なのは、日本のアニメグッズを売るショップである。『ポケットモンスター』はもちろん、『となりのトトロ』や、『カードキャプターさくら』などの人気アニメのグッズが並ぶ。ショップにはマンガの本も売られており、韓国で人気の『金田一少年の事件簿』や、『名探偵コナン』がずらりと並ぶ。現在韓国では、日本で出版された人気マンガの単行本はすぐに翻訳され、その流行に時差はほとんどない。韓国でのマンガを語るとき、いまや日本マンガを無視することはできない。COEXに来ると、「日本文化」は、韓国にこんなにも浸透しているのかと驚かされる。そして、こんなにも「日本文化」はおおっぴらに売られるようになったのかと、変化を実感させられる。

これまで韓国では、日本マンガは人気を博す一方、市民団体の影響調査報告書などでとりあげられ、「暴力的で煽情的な、低俗なものだ」という非難を浴びることも多かった。メディアで取り上げられる日本マンガイメージとして、「暴力的で煽情的」は既に一つの決まり文句といえるほどである。

日本との間に歴史的問題を抱える韓国の人々にとって、「日本」や「日本文化」の持つ意味合いは複雑である。一九四五年の解放後も、日本のマンガや歌謡曲は韓国に流入し、人々の間で親しまれていた。しかし公式的には、長い間日本大衆文化の輸入は禁止されてきた。輸入禁止の根拠は、国民の反日感情であった。このように、韓国の人々は、親しみと反発が混ざり合う感情の中で「日本」や「日本文化」をとらえてきた。

韓国マンガの状況も例外ではない。韓国のマンガ文化は、韓国の人々のもつ文化の見方と、「日本」や「日本文化」に対する複雑な感情の揺らぎのなかで作られてきた。そのため現在行われている日本大衆文化開放[1]やマンガ状況の変化は、こうした歴史の積み重ねの中から理解されるべきだろう。しかし、現在、日本で行なわれている研究の中で、韓国における日本大衆文化の受け入れを歴史的に考察したものは少ない[2]。また、ジャパナイゼーション[3]として、日本のマンガのアジアへの影響が関心を集めてもいるが、現状では韓国についてはマンガに特化した研究はない。

そこでこの論文では、日本マンガの流入によって、韓国におけるマンガについての言説の中で「日本」がどのように位置付けられていたのかに注目しながら、一九四〇年代から九〇年代後半までの韓国マンガの歴史の全体像を確認していきたい。

その際、民主化以前の資料が少ないため、論文では、韓国のマン

ガ研究家孫相翼のまとめた通史を中心に歴史を追うことにする。これに加え、九九年に行ったインタビュー調査[4]を参考にする。

1　非合法流入時代-民主化宣言以前（一九四五年～一九八七年）

現在、韓国のマンガの原型は新聞連載された四コママンガにあるとされ、日帝時代に日本から持ち込まれたものと考えられている。マンガの単行本が現れたのは、一九四五年の解放から二、三年後とされる。また、韓国のマンガ通史をまとめたマンガ評論家孫相翼（ソン・サンイク）によれば、この当時、出版社は零細であり、流通網は局地的なものであったため、書店に単行本が並ぶようなことはなかったようだ。むしろマンガは、文房具屋やおもちゃ屋の店先に置かれ、客寄せに使われるものだった（孫、1998 p202）。

この状況に変化が見られるのは一九五〇年から始まった朝鮮戦争が、五三年に休戦を迎えた後のことである。まず、五〇年代半ば、「チャッパン」が登場する。これは市場周辺でマンガを並べ、道行く人々にマンガを読ませて代金をとる露天である。「チャッパン」の店主は、当初、書店から卸値でマンガを購入し、それを道に並べていた。五七年にソウルに総販（卸売店）が出現すると、出版社から総販を経て「チャッパン」へ供給されるようになった。このマンガの流通ルートは、総販の増加とともに全国規模に広がっていった（孫、1998 p203-4）。流通網の拡大によって「チャッパン」は、現在も町の至るところに存在する有料のマンガ図書館、「マンガ房」へと発展していく。

五〇年代は、日本マンガが流入し、不法にコピーされ、流通するようにもなった時代でもある。

当時、日本と韓国は国交が途絶えていた。韓国では、外国刊行物の輸入は法的に制限されており、マンガを輸入することは禁じられていた。しかし、両国の間では密輸入の形で様々なものが行き交い、その中に日本のマンガも含まれていた。このように、日本マンガは地下でやり取りされる貿易品であったため、日本マンガの流入がいつ始まったのか、また、最初にはどのような作品が入ってきたのかを確定することはきわめて難しい。

当時の日本マンガの流入の様子を知ることのできる数少ない例として、大変な人気を博した『ジャングルの王子』という単行本マンガをあげることが出来る。『ジャングルの王子』は、五〇年代に、釜山の業者の手によって持ち込まれたもので、一九四〇年代の日本のマンガ『少年ケニア』の不法コピー版である。当初は、韓国のマンガ家に原本を模写加筆させて出版していたが、巻が進むと完全なコピーになる。このとき用いられた複製技術は、のちの不法コピー作成にあたっての典型となった。しかし、このマンガは高級化を目指して製本されたため、印刷状態や製本もよく、韓国マンガの製本技術の水準を引き上げたと言う面もあった（孫、1998 p70-71）。

日本マンガの不法コピーは、単行本だけでなく子供向けの雑誌などに連載されるマンガにまで及んでいた。コピーマンガは、表紙にある日本人の作者名が消され、そのうえに韓国人作家の名前がハングルで書き足されていた（孫、1998 p69）。従って、流入してきた日

本マンガは、基本的にそうとは知られずによまれていたといえる。しかし、韓国におけるマンガ史の議論では、一九五〇年代が「日本低俗マンガの流入期」と位置付けられ、日本の低俗マンガが流入したことで、低質不良マンガの論議がはじまったとする見解が優勢である（文化体育部、1997 p34）。当時韓国国内で流通していたマンガの中で、どれが日本マンガなのか識別されていなかった以上、低質不良マンガが日本マンガであったとはいいきれないだろう。にもかかわらず、こうしたマンガ史の見方は、文部省にあたる韓国の機関、文化体育部が一九九七年にまとめた報告書や、出版政策資料集の記述にもみられ、広く共有されている。一体なぜ、このような考え方が受け入れられているのだろうか。これには韓国の歴史の見方が影響していると思われる。

韓国哲学研究者の小倉紀蔵は、韓国には、特徴的な歴史の見方として、「韓国では歴史は歴史解釈によって、あるべき理想の歴史へと不断に改造され続けなければならない（小倉、1998 p176）」という一つの支配的な考え方があることを指摘している。この考え方によれば、歴史は、しばしば現在の視点から新たに意味をつけられるものであり、新たな構図が「創出」され続けているといえる。マンガについても同じような見方が可能である。つまり、現在の時点から語られるマンガ史には、日本の低俗なマンガと無色透明な韓国マンガという、後になって「創出」された見方が前提としてすでに入り込んでいるのではないだろうか。

日本のマンガと低俗を結びつける構図は、「日本のマンガ」という認識なくマンガを読んでいた当時の人々に、どれほど共有された概念であったのかわからない。むしろ、韓国におけるポピュラーカルチャー（韓国の表現では大衆文化）自体のイメージが、日本イメージとは別に、「マンガは低俗だ」というイメージを規定していたと考えるほうが自然ではないだろうか。

また実際、当時のマンガの評価を見てみると、日本イメージとは切り放された所で、不道徳あるいは、悪という評価をあたえられている。たとえば、六〇年代、朴正熙による軍事政権下では、撤去すべき社会悪には何があるかといったことが盛んに新聞などで議論された。議論の中で、麻薬や暴力、詐欺、密輸など「悪」が次々あげられていくなかで、マンガも社会悪だ、という者もいたという。このような話から今では、当時マンガは六大社会悪の一つにかぞえられた、といわれる事もある。マンガはこうした話題の中でマンガが取り上げられたことや、マンガの事前審議制度がこの時期導入されていることからも、マンガは不道徳なもの、という評価はかなり定着していたと考えられる。

マンガはこうした否定的な評価を受けながらも、人々に読まれていた。七〇年代中盤、日本のマンガの不法コピーである『キャンディキャンディ』は、中高校生を含む幅広い層に爆発的人気を得た。

「『キャンディキャンディ』を読んだとき、なんて面白いマンガだろうと思った。作家の名前を覚えておいて、次の作品を期待していた。なのに、ぜんぜんでないから、どうしてだろうと思ったの」

（マンガ翻訳家・C氏）

上のインタビューにも見られるように、『キャンディキャンディ』は当時読み手にとって韓国のマンガだった。韓国マンガのなかの、日本マンガの位置付けは、五〇年代以降、この頃になっても変化していない。「日本」の部分を隠蔽された日本マンガは、韓国マンガの一部となって、「潜伏」していたのである。

『キャンディキャンディ』や、同様に人気があった『ベルサイユのバラ』は、韓国の純情マンガすなわち日本でいうところの少女マンガに、インパクトを与えた。

八〇年代、韓国の純情マンガに、キャラクターの内面を描くためのナレーションが登場するが、これがその影響として指摘されている（SICAF97、1997 p23）。

内面の表現方法を手に入れた純情マンガは、従来の母子もの中心の物語から、世界や人生、人間というテーマを扱うようになって、その世界を深めていった。そして、純情マンガは、テーマを拡大するとともに、新しい読み手も開拓していった。

八〇年代には、成人マンガもブームを迎えた。韓国の成人マンガは、日本の成人マンガのようにポルノマンガを示すのとは異なる。むしろ日本でいう少年マンガや、青年マンガに分類されるようなジャンルである。このジャンルで当時人気を獲得していたのは、『明日のジョー』に代表される、ちばてつやの作品であった。もちろん、ちばの作品も、日本マンガとは知られていなかった。この頃人気を博した成人マンガは、日本マンガの不法コピーだけでなく、韓国人作家の手によるマンガも多い。現在でも活躍するマンガ家イ・ヒョンセの『恐怖の外人球団』はこの頃発表されたものである。この作品は八六年に映画化されるほど、人気を得た。

七〇年代から八〇年代は、現在も活躍する韓国人マンガ家が出そろい、純情マンガや成人マンガが充実した。マンガは軍事政権下で抑圧された人々の娯楽として支持を集めた。しかし、マンガを求める人々の欲望を全斗煥政権の「愚民化」政策に操作された結果とする考え方もあり、「アクションもの、貧しい主人公があらゆる手段を用いて成功する姿を描いた財閥ものなどの氾濫は、物議をかもした（増田、1999）」という。人々が娯楽として求めるマンガと、社会の道徳観はぶつかりあっていた。当時を知るマンガ家I氏は、「五月五日のこどもの日には、決まってYMCAなどの市民団体がマンガ排斥運動をしていましたよ。」と語る。

マンガを制限していったのは、社会の道徳観念だけではなかった。軍事政権による、表現の規制も大きな問題だった。韓国マンガは七〇年代以前から事前審議が行われていたが、政権は一九七〇年には刊行物倫理委員会を整備して、マンガの描写を特に厳しく規制するようになっていた。

「刊行物審議倫理委員会のマンガ部では、女性アルバイトがマンガを見て検査していました。人を殺すシーンで刀をかいたらだめなどといった基準が決められていました。だから七〇年のマンガに

は、人殺をしているシーンに刀が描かれてないんですよ。他にも、兄姉でも男女が一緒の布団で寝ていたらだめだというのもありました」（マンガ家・I氏）

こうした、強引な描写の規制とともに、その内容も厳しく制限された。その様子は韓国で最も人気のあるマンガ家の一人、黄美那（ファン・ミナ）の八六年の作品『われらは道に迷った小鳥をみた』が受けた規制の例からうかがえる。黄は、韓国の実生活を背景にした純情（少女）マンガを描こうとしたが、「社会のくらい面を子供に見せてはいけないという理由から（審議会からの）クレームが多発した。（佐島、1999 p53）」という。その内容は、「父母の離婚はダメ。板小屋バラックもダメ。貧民街に高級車が入ってくるシーンもダメ。不正に我慢ならず飛びかかる主人公は暴力的だからダメ。力なくうつむいて歩くシーンは虚無的だからダメ。（佐島、1999 p53）」というものだった。その上で、黄は、「総て書き直しあるいは原稿破棄を要求され、ついには『現代社会への批判は一切禁止』という政府からの警告文を受ける（佐島、1999 p53）」に至ったというのである。

審議自体はこのように細かく厳しいものだったが、審議の対象は限定されていた。日本日本マンガの不法コピーは、文化の輸入禁止を建て前とする政府の政策のため、存在しないものとみなされ、審議対象からはずされていた（林、1996）。また、事前審議はマンガ房用のマンガに設定されていたため、大人向けの書店用単行本マンガも審議の対象外だった。

八〇年代以降、大学生以上の男性顧客の多くなってきたマンガ房は、客の求めに応じて、審議対象外のマンガもそろえるようになっていた。大人達によって、審議外のマンガが指向されてゆくにつれて、マンガ文化のアンダーグラウンド化がすすむことになったのだった。

孫相翼は「マンガ房は路地ごとにあるというぐらい、無分別に表れてきた。学校周辺のマンガ房で、未成年にたばこを売り、喫煙の黙認が行われた。駅周辺のマンガ房は、家出少年のたまり場になり、青少年の暴力事故の震源地にもなる。マンガ房の内部に密室をつくり、外国製ポルノを放映するところも出てきて、市民団体やマスコミの非難の的になった。（孫、1998 p210-11）」と、八〇年代のマンガ房を記述している。マンガ房が世論から青少年犯罪の温床のように見られるようになると、マンガはどこかうしろめたい雰囲気の漂う、「地下」文化として定着していった。

文化体育部は報告書の中で、「八〇年代に入ると大部分の淫乱な日本マンガは非公式的なルートを通して海賊出版され、流通した。（文化体育部、1997 p39）」とまとめている。現在では当時を振り返って、審議をすりぬけた日本マンガはポルノが中心だったとする見方は強い。そして、そのために、マンガはいっそう低俗だと考えられるようになったのだと指摘される。

マンガを読んでいる人々にも、このようなイメージは共有されている。「日本マンガといえば、ポルノというイメージがあった」、あるいは「あのころ（八〇年代頃）は、本当に低質な日本マンガも、

儲かるからと言う理由ではいってきた」等、インタビューに答えてくれた人達は当時を振り返る。しかし、ポルノマンガの具体的なタイトルをあげられる人は無く、さらにそうしたマンガを実際には見たことがないという人もいた。そのため、彼らの言うポルノが、一体どのようなマンガをさしていたのかはわからない。

そもそも、日本マンガと低俗を結びつける議論には、あいまいな点がある。こうした議論では、低俗なのは一部の日本マンガなのか全部なのかが明確にされないことが多い。そもそも、「マンガのなかで、兄姉でも男女が一緒に寝てはいけない」という規制を引いていた韓国社会にとって、なにが「低俗」だったのだろうか。

「大部分の淫乱な日本マンガ」には『キャンディキャンディ』や、『明日のジョー』等の人気マンガがふくまれているのかはわからない。しかし、当時人気を集めた日本マンガの受容の様子を見る限り、韓国のマンガイメージの悪さの原因は、日本マンガの流入にあると考えるのは困難である。

「『キャンディキャンディ』が、実は日本のマンガなのだと、ずいぶん後になって知ったの。そのときはショックだったわ。あなただって、子供の頃から自分が慣れ親しんできた大好きな作品が、外国のものだったって知らされたらショックじゃない?」(マンガ翻訳家・C氏)

この意見にもあるように、当時の読み手は、低俗な日本マンガの噂を聞いたとしても、すくなくとも、自分の読んでいる『キャンディキャンディ』と結びつけて考えてはいなかったと思われる。彼らにとって、それは韓国人作家の手によるマンガ同様名作であった。だからこそ、彼らは、日本のマンガであるとわかったとき、「ショック」を感じることになったのだろう。

八〇年代は、それ以前と同様に、日本マンガの多くは韓国マンガに一体化していた。しかし、マンガ界の一部では、なにをもって低俗というのかはあいまいだが、「日本」という要素が意味を持ち始めていたことも確かである。

II 日本の評価との接合-民主化以後(一九八七年〜)

韓国のマンガ界において、日本マンガがいたるところに広まり、注目を集めるようになったのは民主化以降のことである。このときから、韓国マンガ全体のイメージは「日本」の部分に引きずられるようになる。一九八七年の民主化宣言以降の時代は、八八年ソウルオリンピック、八九年海外渡航自由化と、韓国社会と世界をつなぐチャンネルが増加した時代である。時代とともに、韓国に流入する情報は増大していた。

この時期マンガ文化は、一気に「地上」へ浮上する。しかしマンガは、韓国のポピュラーカルチャー観のために、不道徳、低俗、さらには青少年犯罪の温床というイメージを与えられてアンダーグラウンド化していた。そのためマンガ文化の浮上は、低俗と人々が見なしていたものが巷にあふれると言うことを意味していた。

マンガの急浮上に手を貸したのは日本マンガの大量流入だった。この時期、『北斗の拳』、『ドクタースランプ』、『シティーハンター』など、日本で人気を誇った少年マンガが大量に流入した。中でも『ドラゴンボール』は、十万部売れれば大ヒットという韓国のマンガ市場で、二五〇万部という売れゆきを示し、マンガを読まない人々の注目までも集めた。また、『スラムダンク』も人気が高く、売上により出版社が設立されたほどの成功を収めた。現在、数種類のマンガ専門雑誌を出版するその出版社、鶴山文化社は、ソウル文化社、テウオン出版に次ぐ大手出版社となっている。

日本マンガの大量流入きっかけは、マンガ専門誌の登場にあった。民主化宣言以後、出版自由化を受けて、『宝島』を先駆けに、二十誌余りのマンガ専門誌が創刊された。それまで、韓国にはマンガばかりを掲載した雑誌はなかった。マンガは、学習雑誌の付録や、紙面の一部に掲載されていたにすぎなかった。専門誌の登場によって、「マンガはマスメディアの一部となった（SICAF95、1995 p26）」と言われている。

創刊されたマンガ専門誌は、『ドラゴンボール』や『スラムダンク』を翻訳し、連載することで飛躍的に売り上げを伸ばした。これらの日本マンガは、雑誌掲載されるだけでなく、単行本としても出版された。その単行本には海賊版も出て、学校周辺の書店や文具店、露店、マンガ房などで大量に出回った。これらのマンガは、マンガ専門誌に掲載された時点から、日本との版権契約は結ばれていないコピー版である。出発点から海賊版であった日本マンガは、次々にコピーされ、雑誌以外も巻き込んで、あらゆるマンガの流通ルートを通じて出回ったのだった。

韓国マンガと一体化して「地下」を流通していた日本マンガの不法コピーは、『ドラゴンボール』と『スラムダンク』の二大人気マンガの力によって、市場に公然とひろがりはじめた。これは、従来とは決定的に異なった事件だった。従来の日本マンガが、日本マンガと意識されていなかったのに対し、これらのマンガは、「日本」のマンガだとわかって読まれたのである。勿論、これらのマンガが、発表時に日本のマンガだと断られていたわけではない。しかし、海外渡航が自由化され、日本の情報もかつてより入手しやすくなっていたこと、また、その情報が急速に広がっていくほどに多くの人々がこのマンガに関心をよせたこと、この二つが重なり合って、「日本」のマンガは広がったのである。

韓国刊行物倫理委員会は、この状況を無視できなくなった。委員会は、九一年、日本有害マンガの輸入防止を目的に外国マンガ審議制度を準備して、日本マンガの審議をはじめた。しかし皮肉にも、この措置によって輸入が公式に認定されたとみなされ、流入は加速したのだった。

韓国マンガ市場は、日本マンガの人気によって拡大した。それとともに、マンガ専門誌は売れゆきを伸ばしたが、マンガ房を駆逐することはできなかった。

マンガがアンダーグラウンド化したころから、マンガ房は青少年犯罪の温床のように見られていた。九〇年には学校保健法によって、

施設の取り締まり対象に指定されるまでになった。しかし、先にも述べたように、マンガ専門誌は、衰退したマンガ房の代わりに勢力を伸ばすことは出来なかった。貸与店とよばれるレンタルマンガショップが、一九九三年改正された図書館法と出版振興法をうけて登場したためである。貸与店は雑誌や単行本を店内にとりそろえ、一冊あたり一日二百～五百ウオン[5]程度の安価な貸与料を設定し、マンガ房に取って代わる勢いで増加したのだった。

出版社は、雑誌を購入して単行本を買うという日本型のマンガ消費形式への移行を試みてきたが、競合する貸与店やマンガ房の存在にはばまれ続けた。韓国では、マンガを借りて読むというスタイルが定着していたためである。その結果、九〇年代に韓国では、雑誌、マンガ房、貸与店が共存することで、雑誌の読み捨てをともなわないマンガの大量消費形式が完成した。

韓国では、マンガは基本的に「借りて」読む物である。そのため、マンガ房や貸与店は定着しやすい。しかし、雑誌は「買って」読まなければならない。この状況で、出版社が売上を維持し、さらに利益を拡大していくのは困難なことであった。マンガ専門誌を売り続けるためには、どんどん新しい、かつ魅力的な作品を連発するより他にない。しかし、韓国人マンガ作家の数は少なく、需要に追いつくほど多くの作品を作り出せなかった。そして、マンガ専門雑誌には、競合するマンガ房や貸与店とならんで利益をあげながら、国内作家を育てる場として機能できるほどの余裕は無かったのである。韓国マンガ市場は、供給が需要に答えられず、かといってそれ以上の国内調達は不可能であったために、輸入にたよることになった。雑誌に掲載される翻訳日本マンガは、ますます増加した。

日本マンガの流入は、雑誌が読者の需要に答えただけでなく、ジャンルの増加と、読者の年齢層の多様化にも影響した。日本から輸入されてきたマンガは、少年マンガ中心から、次第に青年マンガ、少女マンガなど様々なジャンルに渡り、やがて、日本で人気のマンガは殆ど翻訳されていると言われるまでになった。こうしたジャンルの拡大は、小・中学生時代にマンガを読み始めた子供たちが、高校生・大学生になっても読むことができるような作品の、絶対数の増加につながった。

マンガというメディアへの注目は、このような日本マンガの大量流入のインパクトのために、高まらざるをえなかった。しかし、それがマンガを読まない人々の目を引いたのは、その語りが、反日言説の形をとっていたからである。

民主化宣言以後の韓国社会では、マンガに限らず日本の大衆文化はかつてないほどに盛んに受容されはじめていた。これは、人々が親しんできた文化のなかで、民衆文化運動に含まれなかった残余の部分に、スポットがあてられるきっかけにもなった。しかし、その初期には、日本大衆文化の「日本」の部分に論点が集中しがちだった。知識人達は、流行現象の分析と言いながら、日本のマンガ、アニメーション、音楽が若者に受容され人気を得ていることを「倭色(日本的)」文化による「汚染」ととらえ、日本文化批判を繰り広げていた(本田、1997 p269)。

日韓の関係は、八〇年代末からは教科書問題、九〇年代に入ってからは従軍慰安婦問題と、韓国の人々を反日に駆り立てる要素に満ちていた。また、九三年に就任した金泳三大統領は、反日をカードに日韓関係をとらえていた。軍事政権から解放された人々は、外国からの情報の流入に自由を感じると共に、年々の驚異的な経済成長率を目の当たりにし、自信にあふれていた。九三年に出版された反日SF小説『ムクゲの花が咲きました』[6]は四五〇万部、反日紀行エッセイ『日本は無い（悲しい日本人）』[7]は一〇〇万部を売り上げた。「民族中興」として自国をたたえる風潮は高まる中で、それを支えるものとして、反日ナショナリズムが最高潮に達していたといえる。

マンガも反日の文脈でとらえられ、バッシングを受けることになった。その理由は、この頃のマンガが日本マンガの大量流入をうけて市場を広げていたので、「日本」イメージが強かったことにある。さらに、マンガは、低俗な文化という古くからのイメージを纏って浮上し、人々の目にさらされていたため、反日の文脈で語りやすかった。なぜなら、この頃の反日の言説は、日本文化に低俗という評価をあたえ、否定することを目的としていたからである。

「日本マンガの韓国攻略はすでに危険な水準に達している。忙しい日常に追われている間に我々の子供たちは性と残忍さを本質とする日本のマンガに中毒をおこし、自らも知らぬ間に破滅的に従属してしまった。韓国刊行物倫理委員会によると、市中に出回る海賊版日本マンガは四〇種余りに上り、児童マンガ全体を席巻しているという。（中略）日本マンガ進出の先駆けを果たした「ドラゴンボール」の場面をみると、性と暴力という日本文化の特性をそのまま表している。（中略）日本マンガは暴力に対する寛容的態度を見せ、これは児童マンガにそのまま溶け込んでいる」（朝鮮日報 91/5/11）

記事からは、日本マンガに魅力を感じ、受け入れている人がいるという現実が読み取れる。しかし記事の目的は、受け入れている人がいるという現実を前にして、受け入れている人を批判するのではなく、日本文化を批判することにある。そうすることで、「本当のところ韓国人は受け入れたくないのだ」という「韓国人」の立場を確保し、現状が解決できると考えられている。この様に、反日言説は、現実を「見ない」ことを可能にする。この時期、主に知識人や新聞によって書かれたマンガについての文章は、反日言説にあふれている。彼らは、日本文化が流入・受容しているという事実を否定したいという強い共通の意識を持っていた。

またこの種の、「日本マンガの悪影響論」のなかには、マンガの内容の低俗性を批判するものの他に、その経済的な脅威を訴えるものもあった。主な主張は、「競争力の強い日本マンガが入ってくると、韓国人作家による韓国マンガ市場は日本マンガに席巻されてしまい、文化的に日本に隷属してしまうのではないか」と言うものである。この経済的な脅威論は、この時期、かなり感情的なものが多かった。

「我々のマンガが素材の制限と支援不足で零細性を免れないでいる中で、八〇年代末から日本マンガが無断複写で流入し始めた。初めには傍観していた日本側が、最近に入って原稿料を要求している。一旦、韓国読者らに日本マンガを味あわせておいて、これからは金をもうけようと言うのだ。(朝鮮日報95年4/10)」

九〇年代初めには、上の記事のように、反日的な日本マンガイメージが主流であったため、マンガは日本の文化侵略の先方だという陰謀説まで出回った。

九〇年代中盤にかけて、マンガにはアンダーグラウンド的な「低俗」、「青少年の逸脱」といったイメージの他に、反日的なイメージが付け加えられていった。ここで初めて、日本マンガと低俗を結びつけるマンガ史の一局面が成立するようになる。まさしく、「日本マンガの流入によって、韓国に置けるマンガのイメージは悪くなった」のである。日本とマンガが、低俗なものというイメージを媒介にして、結びつけられた結果であった。

イメージの結び付きの結果、マンガに接する人々は複雑な立場に追い込まれた。マンガを読む人々は、マンガを読むことによって、それが社会の中で正統と考えられるような文化的な序列から外れた行為であるというだけでなく、韓国人としても正しくない行為をしているのだと、感じるようになってしまったのだ。

ソウルYWCAの九三年の報告書では、小中学生に「好きなマンガ」を選ばせたところ、『ドラゴンボール』と『スラムダンク』が上位を独占した。しかし、同時に子供たちは、日本マンガの評価として「暴力的で残忍な絵が多い」「淫乱、低質な台詞の多さ」などといった「悪影響」を訴えていることになっている(林、1996)。日本マンガは好きだけど、日本を好きといってはいけない。この葛藤は、この時期に、マンガの読み手の中で最も大きくなったのではないだろうか。

九六年にはマンガは発行種数五千五百九十二種で全発行物の十七・三%を占めるようになっていた。発行部数は千八百二万部数。出版部数全体の十・二%である。マンガへの複雑な感情を抱く人々は、マンガの発行部数と共に増えていった。

III マンガをみる新しい視点と従来の視点:日本大衆文化開放前夜

九〇年代に入ってから、日本マンガの流入や影響は、反日言説のバリエーションとして語られた。しかし同時に、日本マンガの産業的成功が印象づけられたのも事実だった。

そのため、マンガは厳しい批判に曝される一方で、国産産業化されようともしていた。政府は九五年に出版社などを主導し、SICAFと呼ばれるマンガの産業博覧会を企画、開催した。「現代社会の情報化や高度化に、マンガは対応できる。マンガは単純な娯楽や趣味ではなく、高付加価値産品である。(出版政策資料集、1995)」とマンガをとらえ、「キャラクターデザイン、ゲーム、テーマパーク、ファンシー商品、アニメーションの各産業の発展を左右するメディア

（文化体育部、1997）」と位置付けて、文化産業の発展の鍵を握る商品として産業振興を目指し始めたのだった。

国産産業を担うのは、当然韓国人だと考えられた。そのため、韓国人作家が描いたマンガが必要だと考えられ、産業の担い手育成が急務とされた。マンガ産業の担い手の育成を目的とし、国内の大学や専門学校でマンガ学科を設置するケースは九〇年代半ばから急激に増加した。韓国で初めてマンガ芸術学科が設置されたのは一九九〇年、国立公州専門大学であったが、九〇年代前半に続いての開校はない。その後九五年・九六年になると急に増加し、毎年五校程度学科が開設され、九九年には二年制四年制あわせて二十四校になっている。大学以外にも、初期教育の実施が目指された。マンガの制作能力を高めるプログラムが小学校の予科の教材として作成されたのもその一つである。さらに、一貫したマンガ教育という考えから、マンガ芸術高校も設立された。九〇年代末には、博物館や資料館がそうした人材の受け皿として各地に建設され始めた。九九年にソウル市にアニメーションセンターが設立され、マンガ、アニメーション資料の市民への公開や、アマチュアへの支援を行っている。同様の施設として、プチョン市にマンガ情報センターも登場した。

韓国のマンガ市場は、民主化以後の経済成長とともに、拡大を果たしてきた。しかし、マンガの出版数が出版年鑑に記載されはじめるのは九四年以降である。これを見ても、マンガが、日帝時代から人々に読まれ続けながらも、社会的には否定的な評価しか受けることがなかったこと、そして本当の意味で社会に注目され始めるのは、九〇年代の半ば以降だったということがわかる。

九〇年代末になって、マンガは大きな利益を生み出す産業としての新しいイメージを獲得しようとしてきたが、その評価は揺れに揺れ続けた。九〇年代末になると、社会は大衆文化を見直しはじめており、日本大衆文化輸入禁止の政策的見直しも始まっていた。マンガは正式に版権契約されるようになり、産業的な基盤は整って、読者層も着実に広がった。にもかかわらず評価が揺れ続けたのは、従来の否定的な評価を塗り替え、新しいイメージを付与するのは困難を究めたためである。低俗の上に反日が重ねられた否定的なマンガへの評価は強固だった。あるものを低俗、あるいは日本的と見て否定するような物の見方は、依然として韓国社会において強力であり、人々はそれを完全に無視できなかったのである。

九七年夏、最も大きな揺り戻しがおこる。青少年保護法の施行である。健全な青少年を悪質な環境から保護しようという主旨のもと、青少年へのポルノや酒、タバコの販売などが規制された。これは全ての大衆文化が対象であったにもかかわらず、マンガに対する取り締まりは厳しかった。日本マンガの海賊版は、猥褻・暴力的という理由で大量に廃棄処分された。さらに、日本マンガだけでなく、韓国人マンガ作家による作品も規制の対象とされ、人気作家による韓国の歴史を扱ったマンガが「猥褻物配布」の罪で起訴、マンガ家は逮捕され、韓国のマンガ市場は大混乱に陥った。青少年保護法の施行により、購読可能年齢が細かく制限され、毎月配布される「禁書リスト」を元に、書店はマンガを管理せざるを得なくなった。その

結果、ソウルの大型書店から、日韓問わずマンガは姿を消し、マンガ雑誌は相次いで廃刊を余儀なくされ、マンガ家達は作品発表の場を失った。マンガは青少年への悪影響を根拠に、ジャンルごと否定されたのだった。

金大中が大統領に就任し、十月に日本大衆文化開放が決定され、マンガを含めた文化産業に華々しくスポットライトが当てられる、前夜のことだった。

おわりにかえて

一九九八年十月に日本大衆文化の段階的開放が決定した。その後韓国マンガにおける「日本」の位置付けは、反日という一つの評価におしこめられなくなってきている。それと共に、マンガというジャンル自体もしだいにその社会的な批判から開放されようとしている。このように、韓国マンガをとりまく諸事情は今もめまぐるしく変化している。

出版社は九〇年代末から、日本のマンガを輸入するだけではなく韓国マンガの輸出を始めるようになっていた。メディアは日本への輸出を「逆進出」として盛んに取り上げたが、実際には台湾へ輸出されている作品のほうが多い。

出版社や政府の担当者は「現在の韓国の作家は、日本マンガを見て育ったために、絵が日本のマンガに似ている。しかし、日本マンガとの差異が少ないからこそ東南アジア諸国にも進出しやすいのではないか」と韓国マンガを分析する。韓国マンガは、国産産業化を目指す上で日本からの影響を評価し、取り込んで行かざるを得ない状況にある。その一方で、彼らはマンガを輸出する立場にあっても「市場性をもたせつつ、韓国らしさを出していけたら・・・」と考えることがあるという。現在韓国では、このような韓国独特のマンガとは何かを考え、マンガのなかに自国のアイデンティティを見いだしたいという思いから、マンガ研究やマンガの国際イベントの開催があいついでいる。

現在マンガにあたえられたイメージは、低俗、逸脱、日本批判、産業的成功、アイデンティティ等様々である。マンガを読む人も読まない人も、これらのイメージをつなぎあわせてマンガを語っている。そのため、韓国のマンガ界における日本マンガや「日本」の位置付けは反日という一枚岩ではなくなり、混乱の中に投げ出されているともいえる。

このような状況がもたらされたのは、韓国がマンガをとらえる時に、日韓両国間だけでなく、他のアジア地域を視野にいれはじめたからである。韓国は日本マンガをとらえるときでさえ、他国が日本マンガにあたえた評価やイメージに敏感にならざるをえない。いまや韓国のマンガは、韓国マンガのなかの日本マンガの受容を語るにせよ「日本」を位置付けるにせよ、二国間の関係からだけで語り尽くせるものではないのである。

注

（1）日本大衆文化の段階的開放が一九九八年十月に決定され、第一次の開放が実施された。九九年九月には第二次開放、二〇〇〇年六月には第三次開放が実施された。第一次開放では、日韓合作映画や有名映画祭での受賞作、そのビデオ、日本語のマンガ単行本やマンガ雑誌が開放された。第二次開放では、日本語の歌謡曲等の一定規模の室内コンサートが認められた。映画の開放対象範囲も広がった。内外八〇以上の映画祭受賞作と、韓国の民間審査機関が認めた家族映画などへ拡大し、上映後のビデオ販売も認められるようになった。第三次開放では、音楽、アニメ、映画、ゲームの分野での開放が実現した。大衆歌謡公演分野は「二千席以下の室内公演」に制限されていた開放制限規定が完全撤廃された。CDは日本語で歌われた曲を除いて演奏CD、第三国語で歌われたもの、韓国語に翻案されたものなどが開放された。アニメは、国際映画祭受賞作（約三十本程度）に限り開放するとされた。映画は暴力、猥褻性が強い「十八歳未満観覧不可」を除くという端緒が付いてはいるが、従来国際映画祭受賞作に限った開放範囲を一般映画全体に大幅拡大した。ゲーム分野は、日本が強いゲーム機用ビデオゲームを除いたパソコンゲーム、オンラインゲームなどの輸入を許可した。

（2）政策史として日本大衆文化開放をめぐる歴史をまとめた論文に、林夏夫【1996】【1998】【1999】がある。また、90年代後半の、開放をめぐる韓国の世論をまとめた論文として、村上純【1997】がある。

（3）五十嵐による定義では「一九八〇年代後半以降、日本経済の東アジアへの大規模な経済進出と平行し、その影響力に後押しされて、日本のポピュラーカルチャーがこの地域に浸透し、一定の影響を及ぼしている状況」とされる。

（4）インタビュー調査は、一九九九年三月と八月に実施した。対象者は、新聞記者二名・マンガ雑誌編集者三名・政府担当者一名・博物館（アニメーションセンター）職員一名・マンガ家一名・マンガ研究家一名・マンガ用画材業者一名・マンガ翻訳家一名・書店従業員三名・マンガ房店主二名・貸与店店主一名・同人誌主催者三名・読者十名である。インタビューは通訳を介して、各人、約一時間ずつ行った。インタビューの様子はカセットテープに録音した。引用部分は、テープに録音された韓国語を元にテキスト化したものである。

（5）百ウォン＝約十円なので、三十円から五十円ほどである。韓国では、アイスクリームが五百ウォンから七百ウォン程度であるので、子供にも手の届く価格である。

（6）金辰明『ムクゲノ花ガサキマシタ』1993　図書出版社ヘネム（韓国語）。南北が協力し核兵器開発を行い、朝鮮半島侵略をたくらむ日本の陰謀を阻止するという近未来（一九九九年）を描いたSF小説。

（7）田麗玉『日本はない』1993　知識工作社（韓国語）。韓国KBS放送の日本特派員である筆者が、二年半の日本生活を綴ったエッセイ。翌年、日本でも『悲しい日本人』の邦題で、たま出版から出版された。

参考文献

伊藤亜人　1996『暮らしがわかるアジア読本韓国』河出書房新社
五十嵐暁郎編　1998『変容するアジアと日本-アジア社会に浸透する日本のポピュラーカルチャー』　世織書房

小倉紀蔵　1998『韓国は一個の哲学である』講談社現代新書
彭元順　1991『韓国のマス・メディア』電通
――1994「韓国への日本文化の進出とその規制」山本武利編　1994『日韓新時代』同文館
佐島顕子　1999「黄美那」Koreac fan vol2 p52-3
鄭大均　1998『日本のイメージ』　中公新書
野平俊水　1996『韓国反日小説の書き方』　亜紀書房
林夏生　1996「戦後日韓文化関係の歴史変化」東京大学大学院修士論文
――1998「韓国における日本大衆文化規制政策の変化」『ワールドトレンド』4月号　アジア経済研究所
――1999「韓国における日本大衆文化『開放』の歴史的文脈」『歴史学研究』7月号歴史学研究会
本田洋　1997「外来文化の受容と消費生活」『もっとしりたい韓国2』1997弘文堂
増田忠幸　1999「韓国漫画入門」Koreac fan vol.1 p56
村上純　1997「韓国における日本大衆文化の『開放』を巡る諸問題」大阪大学大学院修士論文

（韓国語）
大韓出版文化協会　1995『出版年鑑』大韓出版文化協会
――1996『出版年鑑』大韓出版文化協会
――1997『出版年鑑』大韓出版文化協会
文化体育部　1997『出版漫画政策法案』
――1995『出版政策資料集』
――1996『出版政策資料集』
――1997『出版政策資料集』
文化体育部青少年政策室【1997】『漫画する活動』
SICAF　1995『95ソウル国際マンガフェスティバル』ソウル文化社
――1997　『97ソウル国際マンガフェスティバル』ソウル文化社
孫相翼　1998『韓国漫画通史下1945年以降』シゴンシャ

年代	政治の動き	マンガ状況		日本マンガの流入状況	
1945年	第二次世界大戦終結　解放	46-7年	単行本マンガの出版がはじまる	50年代後半	日本のマンガ「少年ケニア」の海賊版「ジャングルの王子」が出版される。
1948年	大韓民国政府樹立　李承晩政権	55-6年	「チャッパン」の出現		
1950年	朝鮮戦争勃発	1957年	ソウルに最初の卸売り店（総販誕生）		
1953年	朝鮮戦争休戦	50年代後半	不良マンガ是非論が知識人の間で取り上げられる		
1960年	学生デモによる李承晩政権崩壊　民主党時代				
1961年	軍事クーデター　TV放送開始				
1963年	朴正熙政権	60年代	「チャッパン」はマンガ房へ発展		
1965年	日韓国交正常化	1961年	マンガの事前審議制度導入		
			韓国オリジナルSFマンガ「ライファイ」が人気を呼ぶ（64年まで連作され、35シリーズが発表された）	70年代	「アタックNo1」「ガラスの城」「エースをねらえ」などがマンガシリーズ「青少年」として導入された。
				70年代中盤	「キャンディキャンディ」が人気を博す。このころ、「ベルサイユのバラ」や「明日のジョー」「鉄腕アトム」「マジンガーZ」等も流入
		70年代	マンガ房の黄金期		
			スポーツ新聞に成人マンガが連載され、人気を呼ぶ。		
1979年	朴正熙殺害　「ソウルの春」釜山にカラオケ上陸	1970年	政府の傘下機関、刊行物倫理委員会によるマンガの審議が開始		
1980年	光州事件　全斗煥政権				
				90年前後	「ドラゴンボール」「北斗の拳」「シティーハンター」「スラムダンク」等が大量に流入
		1982年	マンガ専門誌「宝島」創刊		
1984年	日本のNHKによる衛星放送開始。スピルオーバーが問題になる				
1987年	盧泰愚民正党代表による「民主化宣言」発表	1987年	出版自由化（出版社設立基準緩和）	91年	外国マンガ審議制度導入
1988年	盧泰愚大統領就任　ソウルオリンピック開催	1988年	「ジャンプ」などマンガ専門誌の創刊が相次ぐ。		
1989年	海外渡航自由化				日本マンガの翻訳版出版にあたり、版権契約が結ばれるようになる
		同年	純情マンガ専門誌「ルネサンス」創刊。		
		1990年	学校保保健法制定。マンガ房の立地条件等が規制をうける。これによりマンガ房は衰退。		
1993年	金泳三大統領就任				「くれよんしんちゃん」「セーラームーン」「課長島耕作」等も流入しはじめる
		同年	コンジュ専門大学にマンガ学科設立		
1994年	孔魯明韓国駐日大使による日本大衆文化の段階的開放が望まれるとの発言・波紋を呼ぶ	1991年	外国マンガ審議制度導入	95年以降	
		1993年	図書館法改正。マンガのレンタルショップ「貸与店」が登場する。		「モンスター」「バガボンド」「花より男子」「紅茶王子」「天使禁猟区」、「陰陽師」などさまざまなマンガの流入
同年	政府は文化体育部に、文化産業局を設立				
1996年	OECD加盟	1995年	学校保健法緩和　マンガ房の高級化が進む		
1997年	IMF危機	同年	ソウル国際マンガフェスティバル（SICAF）開催		
1998年	金大中大統領就任	1997年	青少年保護法施行　事前マンガ審議制度から事後制度へ		
	日本大衆文化の段階的開放決定				

The Position of "Japan" in Korean Comics : the History of Japanese Comics Reception

YAMANAKA Chie

The aim of this paper is to confirm the whole history of Korean comics, taking notice of "Japan" 's positional change in it by flowing Japanese comics into Korea.

In recent Korea, it is said that comics have thought to be vulgar readings because of vulgar Japanese comics having flown in Korea from the 50's. This thought is influenced by the image of Japan in Korea, which regards Japanese culture to be vulgar.

Tracing the history of Japanese comics reception in Korea, however, it is obvious that the way of thinking to connect the vulgarity of the comics and Japan has completed after Korea's democratization in 1987. Before its democratization, Japanese comics were read as the works by Korean cartoonists, that is, comics were not directly connected with the element, "Japan". It seems that it rather meant comics libraries :manfa pan- or rental books.

In this paper, the clue to comprehend the relationship between Korean popular culture and the image of Japan will be presented, by confirming the process of connecting Korean comics and the image of Japan.

Key Words

Japanese comics reception / Teizoku(Vulgaeity)/manga / Korea /The image of Japan